
パンツ事件

いちの くう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パンツ事件

【Zコード】

N7576V

【作者名】

いぢのくつ

【あらすじ】

「男子更衣室にパンツの忘れものがあった。心当たりがあるものは後で職員室に来るようだ」
先生のその一言で全てが始まった。
パンツ事件の犯人は一体誰なのか。

その1

ねえ、学校の水泳の授業って好きだった?
僕は何とか25mなら泳げるし、バタフライは苦手だけど、クロールも泳げるよ。

これは僕の小学校で起きたとある事件。
まさか……まさかあんな日にこんなことになるなんて思ってもよくなかった。ホント、後悔してもきりがないよ。

それはいつも通りの夏の暑い日。教室にクーラーなんてないから窓を半開きにして過ごしていきたいいつもの日。

普段は授業後に女子が教室を占領して着替えて僕たちが廊下で待つ、そんな体育の時間なんだけど、今日は違つ。先週から始まつた水泳の授業で、更衣室で着替えた僕たちと女子は次の算数の準備をしていた。

チャイムが鳴つて先生が入つてくる。

そして台の前に立つなり、開口一番。ここから全てが始まった。

「えー、男子更衣室にパンツの忘れものがあった。心当たりがあるものは後で職員室に来るよ!」

当然のように教室内はざわめいた。俺じゃない、お前なのか、いや違う、ということは誰かノーパンなのが、そんな低レベルなりとりが僕の耳に聞こえてきた。

「まさか涉じやないよな?」

そんな声が室内に響いた。

声の主は篠志。涉くんの2つ前の席から間の悠斗を横にやって覗き込むよつこ聞いてきた。こんな事を堂々と口に出せぬのは篠志くらうだ。

「違うよ」

それだけ言うと涉くんは目を逸らした。その反応を見てさらに篤志が聞こうとするところに先生が割って入った。

「はいはい、下らない犯人捜しは後回し。授業やるぞ。一昨日の宿題はやつてきたか？」

一旦その場でパンツ事件の犯人捜しは休止となつた。

先生が授業を進めて黒板に書いていく中、僕は後悔していた。まさかこんな時にこんなことが起きるなんて。

算数が終わって給食の時間へと進んだけど、教室内にずっと先生がいるためか比較的みんないつも通りの様子だつた。

そして昼休み。家が近所ということで特に仲がいい僕と篤志と悠斗の3人はウサギ小屋の横で固まって話をしていた。

「絶対犯人は涉に決まってる」

再度強く訴える篤志。比較的思つたことは口に出す性格だけど、この場合どう働いたかわからない。だけど、何かのアクションにはなるのだと思う。

「確かに涉は一番の容疑者だよな」

席が篤志と涉くんの間の悠斗。僕と幼稚園から一緒の仲だ。篤志ほどではないけど、少なくとも僕よりは色々アクティブな性格だ。

「僕も……確かに涉くんである可能性は高いよね」

あまり人を疑いたくない性格だけど、今回ばかりは仕方がない。僕も容疑者を涉くんにすることにした。

ちなみに6年1組36名のうち、男子は16名。この中にパンツを忘れた犯人がいて、そのうち3名がここにいる。

今、他の13名は全員グラウンドについて、昼休みにパンツをとりに行くという犯人はいないらしい。

「このままだと放課後だな。涉は絶対放課後に職員室へ行くはずだ。となるとつける必要があるな」

そのまま篤志の提案によつて放課後僕と悠斗は職員室が見える場

所で待機、篤志が渉くんをつけることになった。何かあつたら篤志と悠斗の携帯でやり取りをする。うん、僕は携帯を持ってないんだ。

そもそも何故渉くんが容疑者になってしまったのかといつと今までの行動が原因だつたりする。

基本的に何事も平均以上にこなす渉くんだけど、いわゆる『うつかりさん』だつたりする。左右違う靴下を履いてくる、宿題を忘れる（本当にやつたけど、忘れて昼休み取りに行つたほど）、理科の移動教室で持つてきたのが音楽の教科書、その音楽ではリコードーを家に忘れてくる、これらは比較的目立つものだけど、極端な事を言えば1日に1回は何らかのうつかりをする感じ。

だから篤志がああ言つたのはあながち見当違いではないんだ。

そんなこんなでホームルームが終わつて放課後。僕たち3人はアイコンタクトをして作戦を実行した。

職員室前にいると警戒して誰も来ない可能性がある。だから僕たちは窓越しに入口のドアが見える位置にいた。ちょうど校舎の形が『エ』の字で、左上が職員室だから左下で待機している感じになるかな。

『昇降口を出た。家に帰るかも』

篤志からのメール。渉くんは校舎を出たようだ。

僕たちはじつと職員室を見張つている。今のところクラスの誰かが出入りするのは確認できない。

10分が経つた。悠斗の携帯にメールが届いた。

『渉は家に入つていつたよ。しばらく遠くで見張つてゐる』

うーん、どうやら長期戦になりそうな感じかも。

そもそも職員室なんて普段生徒が出入りなんかしない。そして先生でさえそんなに頻繁に出入りはしない。基本的にほとんどの生徒は用もないで家に帰つて、残つてしているのがまれだ。

さうして30分は経つた。

「暇だな」

「うん、そうだね」

「座らないの？」

「いいよ。立ってる」

悠斗は近くの視聴覚室から椅子を持ってきて座つて窓を見ていた。

「オレ思つたんだけどさ、犯人は渉ではないんじゃないかな？」

「え？ ど、どうして？」

「いや、何となくだけど。……なあ、一応念のため2人で確認しないか？」

悠斗の提案が悪魔の言葉に聞こえた。そんな考えが僕の顔に出た。悠斗にとつてはただの時間つぶし的な提案だったに違いないけど、笑っていた目元が口元が数秒で素に戻った。

「おいおい、まさか……」

「違うよ！ 僕じゃないって！」

ゆっくりと僕の方へ寄つてくる悠斗。僕の後ろにある水泳用のバッグに手を伸ばそうとして……僕のズボンを下ろした。

僕もうっかりしてた。てっきり悠斗はバッグの中身を確認するものだと思っていたからだ。狙いはこっちだつたのか……天を仰ぐといつても今は天井。僕は天井を仰いだ。

「これって……」

悠斗は言葉にならない。

そもそもそだ、本来はいっているはずのパンツが水着なのだから。

「え、何で？ ……あつ、まさか家からはいて忘れたパターンか」

悠斗の言つ通りだつた。

僕は着替えを見られるのがいやだつたから家から水着をはいてきた。そして替えのパンツを忘れたのだ。だから確認されるのが怖くて心配したし、濡れるのがいやだつたから余計なところに座りたくなかつた。

「……まあ、気にするなよ。おかげで犯人じゃないってわかつたんだしさ」

慰めのつもりか悠斗は肩をポンと叩いた。そうだ確かにこれで完

全にシロであることが証明できたのだから……こ、何が引っかかる。あ、悠斗の見ていな。僕はそのことを口に出そうとする

悠斗の携帯が震えた。

『全然出てくる気配がない。学校に戻るから校門前に集合な』
渉くんの粘り勝ちのか篤志は諦めたみたいだ。結局職員室を誰も出入りしなかった。

暑さにやられたのかゆっくりと歩いてきた篤志。

「1時間も粘つたけど、渉のやつには負けたよ」

もちろん日陰にいたんだろうけど、この暑さの中1時間も外でずっと見張っていたのだから愚痴が出るのも無理はないと思つ。

「とりあえず伊勢屋に行かない？ 暑くて熱中症になっちゃうよ」

伊勢屋は校門を出て左に3分歩くとある小さなスーパーだ。

僕たちは店に寄つて涼み、トイレで3人それぞれ確認した。おかげで篤志にも水着の件はばれたけど、3人そろつてシロだった。となると残り13名の中にいることになる。ここまできて解散するの名残惜しいけれど、仕方がなかつた。

「じゃあ、明日な」「うん、またね」「じゃあね」

それぞれ家に帰つて行つた。

その3（解決編）

翌日の事だ。

朝のホームルームで昨日は表立つて行動してなかつた晃一くんが先生に聞いた。

「先生、昨日のパンツの件はどうなつたんですか？」

僕らがあれだけ粘つて監視していたんだ。仮に犯人が家に帰つて再び学校に来たとしても1時間待つくらいでは見つけられる。だけど、先生の返事は意外なものだつた。

「お？ 忘れた奴がちゃんと取りに来たぞ」

そんな声が重なつた。昨日の夕方……とは考えにくい。すると朝早く学校に来てから……？

「いつですか？ いつ取りに来たんですか？」

晃一くんがさらに聞く。さすがに犯人が誰だつたかなんて教えてはくれないだろうから、少しでも情報を得ようとしているらしい。いつも晃一くんは学校に来るのが早いから、仮に今日なら大分容疑者が限られるはずだ。

「もちろん昨日だよ。さすがに丸一日放置しておくことはできないだろ」

先生がウソを言つてはいるようには見えない。すると僕たちが帰つた後に来たに違ひない。ああ、もう少し待つていればよかつた。激しく後悔した。

悠斗と目があつた。悠斗も残念そうな顔をしていた。

犯人はわからなかつたけど、事件そのものは解決した。

一度もバッグから出していいのに消えた財布が交番で見つかつたみたいな気持ちだつた。財布もカードも取られたものは何もない。だけど今までのものとは少し違う気持ち。

一番驚いたのは、こんなことに僕自身興味があつたという事。3限の国語の時間に気づいた。探偵になつたわけでもないのにこんな頭から離れないなんて。みんなはホームルーム以降全く話題にしないのに。

でも、ずっと考えていたおかげで怪しい人を見つけることができた。いつもと比べるとたいしたことではないと思うけど、普通に考えるとちょっとしつくりこない。友達関係が悪化しないことを祈りつつ、僕は放課後2人きりで話す機会を作つた。

「家に来るのつて久しぶりだね」

僕は遊びに行つた。あまり自分から『遊びに行つてもいい?』なんて聞いたことがないからちょっと驚いていたけど、それがかえつて良かつたのか断られなかつた。

「あー、そうだな」

2階の部屋に行き、1人待つ。しばらくするとお盆に麦茶を載せて持つてきた。普段の言動からするとちょっと意外に思えるかもしれないけど、僕は知つている。

「今コレやってるんだけど、やる?」

「うん」

レースゲームをすることにした。ゲーム機本体を出してコードをつなげて……僕は見ているだけ。そこで話すことにしてた。

「あのパンツ事件つて結局誰が犯人だったんだろうね」

僕の意識しそぎか、ほんの一瞬動きが止まつた気がした。

「え? 知らないよ。やっぱり渉じやないのか?」

「ちよつとさ、今日の授業中ずっと考えていたんだけど、今考えると篤志の行動つてちょっと変つたよね」

その一言で篤志は僕が何の目的で来たのか理解し、僕も覚悟をした。

「変つてどこが?」

「とりあえず3つかな。最初に篤志が渉くんを追う役になつたこと。

だつて授業で突つ込んでいた篤志一人が尾行したらばれた時に何も言い訳できないよね。……これについてはそこまで考えられなかつたというのもあるけど

「コードを持って屈んだまま篤志は僕を見ている。

「次に、帰つてくるときの集合場所。できるだけ長く見張りをしていた方がいいのにわざわざ校門集合にさせたこと。つまり篤志が僕たちと会つまでに校内に入れる時間があつたんだ。わざわざ外で集合なんて面倒くさいと思つていたんだけど

篤志はあまり表情を変えずに、僕をじっと見てる。

「最後にお店でシロであることを意識させようと少し互いに見せ合つた事。最初から休み時間に全員ですればよかつたのに。……これも後で思いついたなら仕方ないけどね。とりあえずこの3つだけど、特に証拠があるわけでもないんだ。ほら、昨日あそこまで熱を入れたからさ、どうしても可能性を確かめたかったんだ」

言い終わつた僕の説明を聞いて篤志は……笑つた。

「あははは！ お前マジになりすぎだよ！ 僕が犯人のわけないだろー。あはははは……」

全くいつもの篤志らしい笑いだつた。篤志が言つには僕は考えすぎだつたらしい。とにかくあの時は自分が考えている案が一番だと思い、僕たちの意見を受けることなく思ついたことをやつただけ、ということらしい。

いらぬ心配だつたことがわかつて拍子抜けした。ドッと疲れが出た僕はゲームをして真剣に楽しむことにした。疑つてゴメン、その一言も加えた。

楽しいと時間が過ぎるのも早い。まだ空は明るいけど、もう6時になろうとしていた。

「もうこんな時間だね。そろそろ帰るよ

「ん？ ああ、そうだな」

ソフトをしまって、コードを片づけて……篤志がつぶやいた。

「俺なんだ」

「……え？ 何が？」

「パンツ忘れたの」

一瞬何を言つているのか僕にはわからなかつた。とても日本語とは言えない言葉だつた。しばらくしてその言葉の意味を理解した僕は次に「ウソピヨーン」とでも言つてくるのを準備していた。

「とにかく蒸し暑くてすぐに着替えて出たかったんだ。それだけなのに……なのにこんな……こと……に……」

最後まで言えないほど激しく泣き始めた篤志。

推理が当たつていたとかそんなレベルではない。ただ目の前の未だかつて他人の前でここまで泣いたことはないであろう篤志の姿にただただ立ち尽くしているだけだつた。

無理をしていたんだ。それにも限界があつたんだ。
かけてあげる言葉も出てこなかつた。

僕は思つた。

僕がこの事件の犯人なんだつて。

その3（解決編）（後書き）

トリックにあたる部分を自分は「ネタ」と呼んでいますが、この場合は『替えるパンツを忘れて水着をはいている』ネタでした。当然それだけで話はできません。

今まででは出題型の推理小説を書いてきましたが、これだけは無理がありました。よつてしばらく放置していましたが、まさかこんな形で登場するとは……わからないものです。

篤志が行ったトリック（？）も最後の妙なシリアスとも話の流れみたいな感じでした。本当は舞台が小学校ということでもつと子供らしい感じになる予定でしたが……。

自分の脳内が一番のミステリーですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7576v/>

パンツ事件

2011年8月15日03時26分発行